

特集

育てる

伝統が薄れ、生活様式も多様化した今日、子育ての風景は変わってきている。

女性の社会進出、メディアの進出、出稼ぎ、移住などの社会変容にともない、子どもと大人の結びつきには、

伝統や従来の理想にしばられない柔軟性が求められる時代である。

特別展「みんなくキッズワールド」の開催を機に、

アジア諸国の最新育児事情を見ながら、

社会のなかでの子育てのあり方について考えてみる。



シリア アフリン地方



中国 雲南省



社会で 子育てする 仕組み

野林 厚志

(のばやし あつし)

文化資源研究センター

社会のなかで子は育つ

今回の特集は「育てる」というテーマで、特に「子どもを育てる」ということを考えてみたい。「育てる」という言葉のもつ意味は多様であり、その対象はもちろん子どもだけではない。部下や後輩を育てることもあれば、人間の集合体である組織を育てるといったこともある。大や豚といったペットや家畜、花や稲のような植物はもちろんのこと、ときには「愛を育てる」といった具合に、無体物に用いられることもある。対象が異なれば、育てられる目的は異なる。共通しているのは、育てる対象になんらかの思いを育てる側が抱いているということだろう。

かつて機能していた社会の伝統のなかには、子どもの健やかな成長を保證するためのさまざまな考え方や理想、

それらを実現するための社会的な仕組みとしての通過儀礼などが存在してきた。また、それぞれの地域社会のなかで結ばれる子どもと大人との関係は、子どもが成長していくための大切な条件となってきた。例えば、中国の漢族社会では通常、子どもは父方の家に属することになるが、成長に伴う儀礼活動を盛大におこなう役割は母方の親族にあり、子どもの経済的、社会的な後ろ盾となってきた。また、イヌイト社会では、親以外に「儀礼的助産人」という世話人の存在が、子どもが成長していく過程において物心両面において支えとなってきた。ミクロネシアにしばしば見られる母系社会においては、子どもにとって、母方のオジが大切なことを相談する相手であり、その役割はじつの父親よりもはるかに大きいものとなってきた。こうした現象を見ていくと、子どもを育てるのは親だけではないということがわかる。子どもをとりまく社会のなかに子どもを育てるための仕組みが存在してきたのである。

子どもの影が薄い

近代以降の国民国家の出現や経済活動の国際化は、子どもをとりまく環境を変化させ、子どもを育てるという行為に変化を与えてきた。それ以上に、現代社会における地球規模での情報

の流通は、子どもを育てるといふ行為に影響を与えてきた。とりわけ、日本の社会では、社会のなかでの子育てという意識が薄れ、親自身が少ない数の子どもを育てるといふ少子化の傾向が強まり、さらには子育てマニュアルなどに子育ての具体例を学ぶ親や教師が増えている。こうした現象は、親と子どもとのあいだに、より親密な関係を築き、密度の濃い子育てを保證するかのように見えなくもない。一方で、社会のなかで、ともに子育てをおこなうという意識が逆に希薄なものとなっていく。子育ての真つ最中の家族が入居するようなマンションを、簡単に倒壊するように設計してしまうような行為や、子どもの安全を守るための特別な措置といったことが国会で議論されること自体が社会のなかでの子どもの不在を浮き彫りにしているといえるだろう。

これから、ますます子どもをとりまく環境は変化していくであろう。子育ての様子が変わっていくだろう。変わらないのは、子どもを育てるのは大人だということである。子どもが健やかに育つてほしいと願う気持ちを育てる側が抱いていれば、親であっても親以外の人間であっても、子どもにとっては幸せなことであろう。子どもを育てることに対する価値感を社会的ななかで共有できればこそ、子どもは健やかに育っていくのである。



「母性」に近づく父親たち

木村 涼子

(ぎむら りょうこ)

大阪大学大学院助教授

人間とはつくづく不思議な生き物である。妊娠し、出産することができるとは、そのための生殖器官を備えた女性だけが、われわれの社会において、女性が経験する妊娠・出産体験に接近したいと考える男性は決して「ずいしくない」。

各地で開催されている親子教室や子育て講座などには、「パパも妊婦疑似体験」といった催しが組み込まれていることが多い。約10キログラムの重さがある妊婦疑似体験グッズを装着して、妊娠している妻の状態を感覚的にも把握しようとするパパの姿は、現代的なほほえましい光景といえる。あるいは、妻の手をぎぎぎぎ「ヒーヒー」の呼吸法を唱和し、出産の一部始終を妻と共有しようとする夫の姿はマスメディアなどでもおなじみのものだ。

男性はそもそも妊娠も出産もしない。雌雄異体の生物のなかで、体験の共有を目的としてオスがメスの生殖活動を疑似体験しようとする種は、唯一人類だけといえるだろう。このような、身体や本能の拘束を乗り越える行動をとるところが、人間という生物の特殊性であり、それが人間の文化の源泉である。人間が発展させてきた子産み・子育てにまつわる文化は、多様で豊富だ。それは、「男」とはなにか、「女」とはなにかをめぐる社会的・文化的な約束事(ジエンダー)と深くかかわっている。

歴史学の進展により、子育てを女性(母親)にしかできない営みとする考え方は近代になって構築されたことが明らかにされつつある。子どもを産む性である女性には、先天的に母性愛が備わっており、女性であれば子どもをもちたい、産みたい、いづくしみ育てたいと考えるのは自然の摂理である。母性愛本能をもつ女性が家庭で子育てに専念してこそ、子どもは「健全に」育つ。そういった考え方は、産業化を背景とした近代家族の誕生とともに生まれ、強化されていった。

戦後日本においては、「男は仕事、女は家庭」という性別分業が一般化するとともに、「三歳までは母の手で」といった言説が広がることによって、乳幼児期に子育てに専念する母親は増加していった。高度経済成長期には子どもを中心とした家庭文化が花開く一方で、子育て中の母親の社会的な孤立化という問題が生じた。「密室の子育て」状況が、育児ノイローゼや児童虐待などを引き起こす原因として注目されるようになったのは、一九八〇年代以降のことである。

現在、子育てを女性(母親)だけの責任とする考え方は時代遅れのものとなりつつある。冒頭で挙げたように、子産み・子育てにもっとかかわろうとする父親は増えているし、保育現場では男性保育士の導入が定着しはじめている。

マルチメディア時代の子育て

目黒 強

(めぐろ つよし)

神戸大学発達科学部専任講師

児科学会が二〇〇四年に相次いで、テレビ・ビデオ視聴が乳幼児の言語発達に及ぼす悪影響を指摘したが、日本小児神経学会によれば、時期尚早の見解であったようだ。マルチメディアが子どもに及ぼす影響についての研究は途上にあるといえる。だが、子どもをとりまく、急速に変容を遂げるメディア環境に対する潜在的な社会不安が、メディア有言論の形成を促していると思われる。

子育て不安が高まりを見せる現在、藤野恵美「ゲームの魔法」(アリス館、二〇〇五年)はマルチメディア時代の子育てを考える上でのヒントを提供してくれる。小学六年生の女の子がアトピーの検査入院中に長期入院患者である同年の女の子の存在を知るのだが、面会謝絶のため、会うことがままならない。院内学級で教える女性の援助もあり、二人はオンラインゲームを通して交流を深めていくことになる。子どもに寄り添いながら、子どものメディア体験を理解を示している作者の姿勢が印象的な作品である。

ところで、本書はオンラインゲームをミヒャエル・エンデの「はてしない物語」になぞらえている。はてしない物語は、本好きで空想癖のある男の子が古本屋で万引きした同名の小説を読み進めていくうちに、書物のなかの物語世界に入り込んで、ファンタジーエンという国を救うべく行動する

作品だ。虚構世界を生きるという物語体験において小説とオンラインゲームに変わりはないはずだが、「はてしない物語」を読むことを奨励し、オンラインゲームをプレイすることを規制したいと思うのが子育て中の保護者の本音であろう。しかしながら、小説がニューメディアであった一八九〇年代、現在のテレビゲームと同じように、小説が人々の不安を掻き立てていたことが知られている。

『小説』に「新聞雑誌書籍」を「テレビゲーム」に置き換えれば、テレビゲーム有書論として流用できそうである興味深い文章である。「ゲームの魔法」を読んで、子どものメディア接触を性急に規制する前に、子どもとともにマルチメディアとの付き合い方を模索できる親子関係を築きたいものだ、と二児の父親として思った。

ゲームの魔法



東北タイの「孫育て」

木曾 恵子

(きそ けいこ)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



木に布をくりつけた籠り籠で孫を寝かせつけながら、もう一人の孫の相手をする祖母(タイ国マハーサラカム県の農村)

朝九時、寺院内にある村の保育所では、孫を連れてやってくるおばあちゃん姿をよく見かける。東北タイの農村では、若い夫婦が我が子を祖父母に預けて、首都バンコク周辺に働きに出ている世帯が多いからだ。すなわち「子育て」ではなく「孫育て」である。通常、子育てを全うした高齢女性は、寺院での持戒行に参加するなど自らの仏教的な生活世界を築いていくことが多い。しかし、「孫育て」をする女性は持戒行にも参加せず、働きに出ている母親の代わりに再び毎日育児に明け暮れている。

村で「孫育て」が増加するのは、女性の出稼ぎが一般化したことだ。一九八〇年代後半以降、気候条件により収穫が左右される天水稲作を生業とする村では、近隣に労働市場が存在せず、現金収入の機会が極めて限られている。その結果、バンコク周辺都市へ働きに出る者が後を絶たない。

出稼ぎといえは男性の仕事であった時代を経て、一九七〇年代後半から、世帯の維持という役割を付与されていた女性たちが出稼ぎに出はじめた。当初は、規範に反するものとして陰口を叩かれた。しかし、次第に女性が働きに出ることは親を助け、子を養育するひとつの手段として、村人に認識されていったのである。

さて、四月はタイ正月の時期だ。バンコクで働く人びとにとって、長期休暇がとれる数少ないチャンス。両親たちは帰省ラッシュで混み合うバスに乗って、こそっとバンコクから子どもたちと会いにくる。

モンゴルに見る未来の育児

小長谷 有紀

(こながや ゆき)

研究戦略センター



草原でホテルを経営する妻に代わって、男が赤ん坊の面倒を見る

モンゴルではかつて子どもが生まれると、できるだけ悪い名前をつけていた。「名無し」「これだな」「悪い犬」「くそつたれ」といった名前にしておくことにより、邪悪なものに狙われることを防ぐこととする。また「良い子」と褒めずに「悪い子」と連発して愛でる。乳児死亡率が高かった時代、社会全体で乳児を死神の標的にしないよ

う心がけられてきたのだ。日本では近代化の過程で、企業戦士として働く男と銃後の守りを果たす女という図式によって育児はもっぱら女の仕事とされた。時代はとうにも変わっているにもかかわらず、今なお「保育の世界では慣性の法則が働いているように思われる。公的な保育施設を利用するには「保育に欠ける理由」を届け出なければならぬ。例えは、共働きの家庭なら、家庭における女性の不在を「欠ける」状況として証明書付で申し出なければならぬのである。これに対してモンゴルの場合、近代化は社会主義のもと、男女共同参画の理想とともに推進されたこともあって育児を必ずしも女性だけに託そうとはしてこなかった。

子どもの名前もはや美辞麗句となり、子どもの命を守るためには医療に頼る時代になっている。ただし、近年の急激な市場経済化によって、病院に行ける人と行けない人の差が未曾有の勢いで拡大する。ますます育児は女だけに任せられなくなっている。と、このように、ビジネスの才覚はそもそも性差に対応しているわけではないから、性にかかわらず、能力や好みの違いに応じて社会進出がさかんであり、一方の育児は、広範囲の親戚や知人らによって人生の喜びの一部として分かち合いにより実行されているからである。

古きよき共同体が昔ながらに存在しているのではなく、未来の育児の姿をここに見出すことができよう。

特集 育てる

教育熱心なコリアン二世

金 美善

(キム ミソン)

国立民族学博物館外来研究員



ロサンゼルス・ブレスクールに通うコリアンの子どもの発表会

外国で子育てをする親は、さまざまに「異なること」とまどろ。妊娠から出産、育児はもろろ、教育まで、子育て全般で自分が育った環境から常識と予想と期待をリセットしなければならぬ。韓国人の親は、なにより子どもの教育に熱心である。これは子どもにより教育を受けさせて、立派な人になってほしいという、親のモチ

一方こうした子育てに対する親の期待は、外国生活のまどろい解消するための生活戦略でもある。子どもはホスト社会と親の文化との交流を図る立派な論議となる。とりわけ、ホスト社会から学んだ文化や制度を家庭に持ち運んで伝え、ホスト社会の窓口になるのである。親にとっては立派な日本語の先生にだっとなるのだ。

日本では生活する朝鮮半島の出身者は、歴史的に戦前から住み続けてきた旧植民地出身者やその子孫が構成するオールドカマーと、一九八〇年代後半に韓国海外旅行自由化によって来日したニューカマーに大別できる。来日事情は異なるが、学校経験の乏しいオールドカマー二世の母親たちが一番力を入れたのも二世の学校教育であった。今日、在日コリアンが日本社会で同様の能力を発揮できるのはいうまでもなく、貧しい生活費を削って子どもの教育費を惜しまなかった一世の熱心な教育のおかげであろう。学校が終わると、塾通いや習いごとで子どもの一日は長い。子どもへの教育費に生活費を削るはニューカマーコリアンも変わらない。

日本では生活する朝鮮半島の出身者は、歴史的に戦前から住み続けてきた旧植民地出身者やその子孫が構成するオールドカマーと、一九八〇年代後半に韓国海外旅行自由化によって来日したニューカマーに大別できる。来日事情は異なるが、学校経験の乏しいオールドカマー二世の母親たちが一番力を入れたのも二世の学校教育であった。今日、在日コリアンが日本社会で同様の能力を発揮できるのはいうまでもなく、貧しい生活費を削って子どもの教育費を惜しまなかった一世の熱心な教育のおかげであろう。学校が終わると、塾通いや習いごとで子どもの一日は長い。子どもへの教育費に生活費を削るはニューカマーコリアンも変わらない。

当たり前に素朴な願望からくるものである。これは文化や制度が異なる異国の環境におかれても変わらぬ。むしろ、移住先の国では、主流社会に子どもを参入させようとする願望が増し子どもへの教育に「層必死」になる。アメリカで二〇〇万人に達するコリアンが模範マイノリティとして評価されたりするのにも二世への熱心な教育が根底にあるとされる。

家庭と職場が全く切り離され、効率最優先の日本の職場ではまず考えられないことであろう。日本の社会にはあまり見られることのない「子どもたちの居場所」がイランにはまだあるような気がする。

アジアの子育て

イランの「子どもの居場所」

森田 豊子

(もりた とよこ)

大阪外国語大学非常勤講師



イランの私立幼稚園での授業風景

ここでは子どもが愛されている。イランにいとそう感じている。子どもを連れていくと見知らぬ人がお菓子を持って来たりする。親戚などとの行き来が多いためか、どんな人でも例外なく子どもを扱い方を心得ている。首都テヘランなど都会の小学校では子どもが一人で通学することはほと

んどない。親が送り迎えをするか、セルビスとよばれる月極の乗り合いタクシーやミニバスの運転手と契約して車で送迎してもらえよう手配するのが普通である。朝霧のなか自宅の門前で車を待つ親子の姿が見られたりする。帰宅時には小学校周辺はセルビスの車とそれに乗る子どもたちで大混雑となる。その時間帯はテヘラン名物の交通渋滞はさらにひどくなる。自宅に直行する子どももいる。親の職場へ向かう子どももいる。

イスラーム革命後の男女隔離政策によって、小学校から男女別学になるなど社会生活において男性しか入れないところ、女性しか入れないところの区別が厳しくなった。その結果、女性しか入れないところでは女性が働くことになったため、女性の職場が増えることになった。近年では家族化が進み、離婚率も増えている。学童保育制度のないイランでは職場で職員の子どもが遊んでいることはめずらしくないし、常に大人の誰かが子どもを見ているように気を配る余裕がある。裁判所のドキュメンタリー映画にも学校が終わって母親の職場に来ている子ども姿がある。いかめしい裁判官がその子に優しく話しかけるシーンが印象的である。

家庭と職場が全く切り離され、効率最優先の日本の職場ではまず考えられないことであろう。日本の社会にはあまり見られることのない「子どもたちの居場所」がイランにはまだあるような気がする。